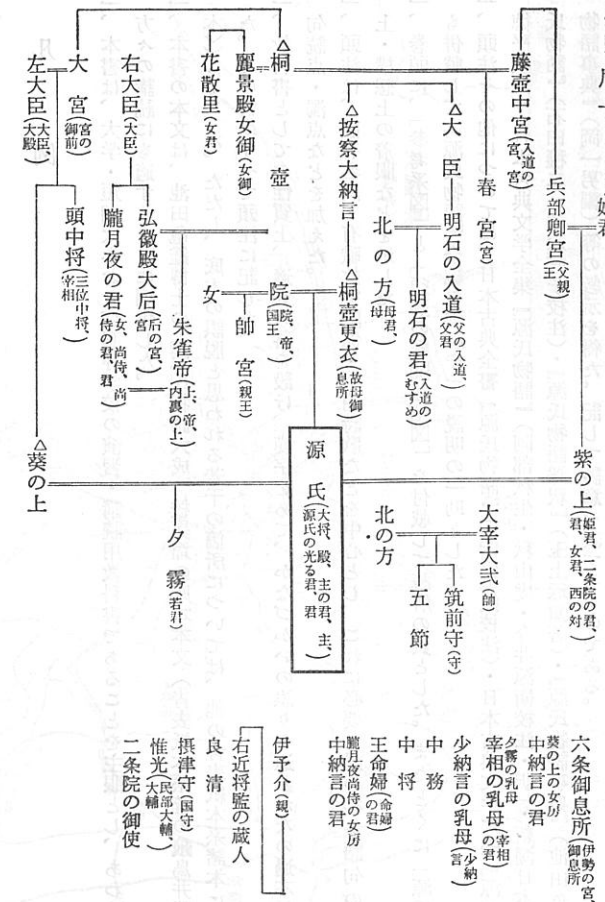
〔参考系図〕

注△印は故人
（）内はこの巻に見える呼称



須磨

一 巻名は、源氏の須磨への退去による。源氏二十六歳から二十七歳。

二 世間の情勢はやっかいなことになり、（源氏にとって）具合の悪いことばかりが、多くなるので。弘徽殿の大后・右大臣一派が、源氏と朧月夜との密会を発見し、官位を剝奪し、除名にしたこと。

三 これ以上ひどい目にあうかも知れないこと。流罪に決ろうとする形勢をいう。

四 今の神戸市須磨区の海岸。屏風絵の名所として名高かった。

五 昔こそ、高貴の人の別荘などもあったが。在原行平（ゆきひら）が須磨の浦にわび住いをした時の歌「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂（もしほた）れつつわぶと答へよ」（「古今集」雑下）をふまえている。

六 人の出入りが多く、あけ放しであらわなような住居は。

七 退去の本志にそわないであろう。

一 世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にありへても、二 これよりまさることもやと思しなりぬ。

かの須磨は、四 昔こそ人の住処などもありけれ、今はいと里離れ心すごくて、海人の家だにまれになど聞き給へど、人しげくひたたけたらむ住まひは、いと本意なかるべし、七 さりとて都を遠ざからむも、故里おぼつかなかるべきを、人わるくぞ思し乱るる。

よろづの事、来し方行く末おもひ続け給ふに、悲しきことといとさまざまなり。憂きものと思ひ棄てつる世も、今はと住み離れなむことをおぼ